

## 第4回青森県生涯学習審議会 概要

- 1 日 時 平成28年3月17日(木) 10:00~12:00
- 2 場 所 青森県総合社会教育センター 4階第2教材開発室
- 3 出席者 <委員>  
太田博之、岡詩子、工藤清子、鹿内葵、澁谷尚子、春藤千秋、出崎真里  
原英輔、増田由美子、三上亨 (敬称略)  
<青森県教育委員会>  
生涯学習課長 児玉政光  
学校地域連携推進監・課長代理 渡部靖之  
企画振興グループマネージャー 森田勝博  
学校教育課学校教育企画監 葛西浩一  
(他事務局2名、総合社会教育センター1名)
- 4 案 件 (1) 県外先進事例視察の報告  
(2) 報告書の骨子について  
(3) その他
- 5 配付資料
  - ・次第、青森県生涯学習審議会委員名簿、座席図
  - ・資料1 県外先進事例視察報告
  - ・資料2 報告書の骨子(概要)
  - ・資料3 報告書の骨子(案)
  - ・資料4 今後のスケジュール
  - ・参考資料1 視察について
  - ・参考資料2 視察当日資料
- 6 審議概要 (◇会長、副会長 ◆委員 ○事務局)  
(1) 県外先進事例視察の報告  
○ 事務局より視察の概要を説明します。説明後、視察に参加された委員から御感想及び報告書に盛り込みたい意見をお伺いし、他の委員からは報告に対する感想をお伺いします。  
(参考資料1を用いて説明)  
◆ 若い方の中で特に地元志向が強い方は、いい暮らしや楽しい暮らしを地元でしたいという思いが強い。かづの若者会議は、これを実現できるシステムの一つである。活動を立ち上げるには熱意がないとできない。かづの若者会議の立ち上げに際しては、秋田県の取組(平成26年度「地域の若者応援事業」)があったことにより、サポートを受け、やり方を教わったことで活動ができた。こういったサポートの枠組みを作ることは大切である。では、青森ではどうしたらよいのか。チラシによる団体の紹介やメンバー募集はあまり効果がないと感じる。また、口コミやFacebook等の活用が大事である。  
何かをやってみたい、参加してみたいという人は意外に多く、「場」がありさえすれば入ってくる環境がある。ただし、しっかりと組織だった団体や実施方法ではない、ゆるい取組が大切ではないか。

Uターンによって都会から帰ってくると、地域の新たな良さが見える。地域とUターン者を結び付ける仕組みづくりが必要であると思う。

五城目町の取組事例はやや特殊で、同様のやり方をそのまま青森で生かすということには疑問が残った。有名大学出身で学力の高い人たちと、五城目町の担当者の行動力は素晴らしいと感じた。

町にある古民家を使った取組についても伺った。古民家に限らず、「何か」は青森にもあるはずで、無理に絞り出すのではなく、楽しく探すことができたものは、その後の取組の広がりが期待できる。

入居している会社の事業についても伺ったが、世界で活躍できる人を育てる事業をしており、これもまた素晴らしい内容であった。

まとめると、1つはキーワードとして「マッチング」「場」「キーマン」「つながり」というものを挙げることができる。もう1つは、行政のサポートや理解も大事だと感じた。

- ◆ 視察先は、両方とも新しい団体で、若者が中心となっていた。また、Uターン者や行政の中にもキーマンが存在した。行政が主導して、まず入り口をつくることは「有り」だと思う。また、公的サポートも必要である。

若い方から意見を引き出すには、「場」の作り方が大事だと感じた。かづの若者会議は県の企画からスタートしたが、事業の終了とともになくなっても不思議ではなかった。しかしながら、キーマンを中心として活動が継続している。

五城目町は、廃校の活用方法と企業誘致を任せられた担当者の、なんとか成功させたいという思いの強さがスタートになっているが、さまざまな場へ出掛け、人との巡り合いの中でだんだんと取組が育ってきた。人を引き寄せることが場づくりにもつながった。このことから、外からの知識と刺激と交わることは重要であることがわかった。スタートしてしまえば、あとは流れるように進んでいく、その取組を行政がサポートする、そのような環境を構築することが大事だと感じた。

- ◆ 町内に廃校になる予定の学校があり、町では校舎の活用方法として考えているのは高齢者施設への転換で、それ以上のアイデアが出ていない。

かづの若者会議で伺ったのは「えふりこき（いいかっこしい、かっこつけの意）と思われたくはない」という話で、これほど楽しく、好きなことができているように見えても、まだそのような意識をもっているのだということがわかり、シニア層がサポートする必要があると強く感じた。

地元で暮らす普段の生活の中から、地域の持つ良さに気づく必要がある。

- ◆ 青森市内の若い方の中にも、「何かをしてみたい」と思っている方はいるが、その後どうしたらいいのかかわからない方が多い。他課との連携も視野に入れた報告書を作成してもいいのか。せっかく素晴らしい取組を視察し、報告書を作るのならば、連携を視野に入れてほしい。

◇ 知事部局も含め、広く捉えることを考えてよい。

- ◆ サポートしてくれる人とキーマンとなる行政マンがとても重要なのだと感じた。小さな団体として「まちづくり」や祭りの運営に携わっている若者達はいるが、その後の広がりが無い。仲間だけで楽しむ集まりになっているのが、とても残念に感じている。やはり、そのような団体をつなげることが必要だと感じている。若者は、他の地域でどのような活動をしているかの情報をもっている。若者には、魅力を感じている団体に実際に入って活動してもらい、体験を通して新たな発見をしてもらえるようにコーディネートできる機関が必要だと思っている。また、多くの施設が使われていない状態になっており、地域の住民からどうにかできないものかと声は聞こえてくるものの、その後の動きは見られない。地域住民をよい方向に導いていくことができればよいと感じている。

◇ 地域住民は危機感を感じている。10年後、20年後の地域はどうなっているのだろうかという思いは持ちながらも、何も行動できないというジレンマを感じながら、時間だけが経過してしまっているのだと思う。しかし、現状的には厳しい状況でありながらも、打ち破って行動している地域もある。その地域では、行政側のトップの立場にある方の理解が得られている。このことは、とても重要だと感じる。

◆ Uターン者が地元の良さを再認識、再発見し、コミュニケーションが人とのつながりをつくることから、Uターン者の話を聞く場面、つながりづくりをすることが必要である。五城目町の例からも、地元にいながらにして世界とつながることはできる。

また、他の事例を見る（視察）ことは非常に効果的で、大事なことだと思った。

◆ 鹿角の取組は、そのなりたちや仕組みを聞き、自分の行っているプロジェクトとそっくりだと思った。考えていることやコミュニケーションの手法などは、私と同じくらいの年代同士ではごく普通のこと、これからのスタンダードになっていくと思う。

私の地元でも廃校になる学校のことは話題になっているが、残すとなるとお金の観点から見ても課題が多い。でも、何かしらのアイデアは出したいと思う。

若者はしっかりとした組織の団体に誘われ、そこで活動することは不要と考えている。これを解決するにはキーマンが必要であり、行政はサポーターとなるべきではないか。若者のアイデアを自由に引き出し、その意見を行政が吸い上げ、何かしたいと思う若者が行政にサポートを求めることができる環境づくりが必要である。

若い人は「外からどう見られるのか」はあまり怖くない。「これを手掛けたらここまで行かない」ということもない。自分たちの満足度や内輪の盛り上がりの方が優先される。それを回りが見て応援できればいいのではないか。

◇ 若い人の意識は変化している。以前は、移住対象者は高齢者であったが、今は若い世代が増加している。移住者を呼び込むには、「旅行に行ったことがある先」が多い。これがポイントになるのではないか。旅行でその土地に親しみを感じるのは「時間を楽しく過ごすことができる」ことであろう。

地元にいる若者の意識は、親が「東京に行ってこい」と話していることにも責任がある。これに対抗するには、「おおわに元気ッズ」のような取組が必要だと思う。

話し合いの「場」からは何か生まれる。場として活用したいのは廃校や公民館で、これらの多機能化が必要ではないか。有償ボランティアからのなりわいづくりがコミュニティビジネスに発展する。

人口減少に対処するには「小さな拠点」でのたすけあい等が必要であると考える。

## (2) 報告書の骨子について

○ 事務局より資料2、資料3について説明

◇ 資料3のページごとに御意見を伺います。1ページと2ページは第1章「本県の地域をめぐる現状」とし、現状と課題について述べる案が示されていますが、何か御意見はありますか。

◆ 一同なし

◇ 次に3ページと4ページは第2章「ふるさとあおもりの魅力を次代に伝える学びの在り方」としていますが、何か御意見はありますか。

◆ 具体的なことをどこまで書き込むか、どうやってやるかということまで書いてもよいのか。

○ 具体的な内容まで書き込んでいただいて結構です。

◆ 子どもたちが実際に外に出かけて地域の良さを知るとい、おおわに元気ッズの取組についても、どこかに入れていただきたい。

◆ 他課との連携を促すためには、ある程度抽象的な書き方も必要なのではないか。

- ◆ 大人を変えるためには多くのエネルギーが必要であるが、子どもたちについては教育現場で取り組むことが可能だと思う。キャリア教育を受けた子どもたちがそろそろ大人の仲間入りをしてきている。ふるさとの良さを育てる指導は重要なことであり、地域で実際に活躍している大人と接触させる取組は、学校において必要な教育である。このような取組は子どもたちの地域に対する意識を変えやすいと思う。
- ◇ (3) ②「大人の姿を子どもに見せる」という見出しは、「大人は常に子どもから見られている」と言い換えることもできるのではないか。
- ◆ 地域の疲弊を打破するためには、「再構築」が必要ではないか。若者が持つ「やる気」と上手くミックスして再構築を進めることが必要である。

「小さな拠点づくり」を考える例として、他県では小学校に老人施設を併設するという取組がある。子どもたちが高齢者と接し、さまざまなことを教えてもらうのと同時に、高齢者も生きがいをもって元気に暮らせるというものである。これからの公共施設の在り方も含め、拠点をどうしていくのか考えるための、ひとつのヒントになるのではないか。このような取組を踏まえ、さらに生涯学習の観点から報告書に入れる内容を考えるのが良いのではないか。
- ◇ 「拠点」が使えないものでは困る。公共施設は何かと使えないことが多い。つながりの強化には「場」が必要で、自由に使えるような仕組みが必要である。
- ◇ 次に5ページと6ページは第3章「ふるさとあおもりの魅力を生かした地域のつながりづくりに向けて」としてありますが、何か御意見はありませんか。
- ◆ 一同なし
- 次回の会議に向けて、報告書の案を作っていくことになりますが、随時御意見を頂戴したいと考えておりますので、よろしく願いいたします。

### (3) その他

- 資料4「今後のスケジュール」について事務局から説明。